

指定演題：Yersinia 感染症特輯

Yersinia pseudotuberculosis 感染症補遺

— 泉熱病原説に関連して —

琉球大学医学部

小 張 一 峰*

(昭和61年10月9日受付)

(昭和62年1月5日受理)

第60回日本感染症学会総会において、藤森一平会長が、エルシニアに関する演題6題を学会異例の指定演題として一括されたのは、*Yersinia pseudotuberculosis* 感染の泉熱新病原説検討の意図からであったろう。本学会（当時日本伝染病学会）は、泉熱が各地に多発し、しかもその本態が解明されていなかった昭和28年（1953）泉熱という単行本を編纂発行している。これは第25回本学会総会（1951年4月）の“所謂異型猩紅熱”と題する交見演説の発表内容を主として集録したものであって、書名の副題に所謂異型猩紅熱と記されている。

その交見演説の中には、ウイルス病原説と疫学的には単族保有説が提唱されている一編もある。しかし、その病原説も確定されることがないままに、昭和30年（1955）頃から泉熱の発生がみられなくなり、泉熱という病名もほとんど忘れられていた。

ところが、昭和56年（1981）岡山県において、久しぶりに泉熱の集団発生がおこった。しかも、その病原が *Yersinia pseudotuberculosis* と推定されたことを契機として、泉熱病原の論議が再び台頭した。

藤森会長が、これに注目されて、エルシニアの演題を指定演題とされたのだろうが、その意図をさらに誌上に延長して、当日の演題2題と追加発表2題が4編の論文として、本誌に掲載されることになった。

指定演題の座長を仰せつかった筆者が、当日の追加発言の要旨などとともに、かつての泉熱への追想を交えた私見を述べて、序文とすることをお許し願いたい。

往時の泉熱と現在のエルシニアを病原体とする泉熱様疾患の比較は、前者の患者材料の保存がないから、病原的あるいは血清学的に異同を論ずることはできない。比較できるのは、疫学的事項とくに集団発生例に共通点のあることと何よりも臨床症状が酷似していることである。その比較のためのもっとも新しい資料が、指定演題セッションに追加発表として提供された。

学会の約40日前、千葉県成田に近い酒々井町の二つの小学校学童の間に、400名を超える泉熱様疾患の集団発生がおこったのである。病原は *Yersinia pseudotuberculosis* であり、おそらく水系感染であろうと推定された。その疫学調査を担当した千葉県衛生研究所と患者の大半を収容した成田赤十字病院小児科から、追加演題が発表された。この中で、患者の発疹を供覧するいく枚かのカラー写真は圧巻であった。

予定発言がすむと、フロアからの発言が相次いだ。発言者は、泉熱の診療に長年従事し、その本態の究明に苦勞された伝染病院のベテランの方々であった。とくにカラー写真の発疹について、かつての泉熱のそれと全く同じである、という太鼓判がおされるような発言もあった。

指定演題の主たる演題が、泉熱の病原として *Yersinia pseudotuberculosis* を提唱しており、追加発言の内容なども考慮するならば、かつての泉熱、

* 沖縄県西原町字上原207

中でも水系感染が推定された集団発生例は、原因は *Yersinia pseudotuberculosis* 感染によるものであったろう、という推論が許されるだろう。

本菌が、食中毒あるいは水系感染の原因菌としてもあらためて認識すべきものであろう。

泉熱という病名は、たとえそれがエルシニア感

染症であることが確定しても、そのままに残しておきたい。昭和の初期、猩紅熱が多発していた頃、猩紅熱と似て非なる疾患として記載され、その臨床的研究と疫学調査、病因究明に生涯の努力を傾注された泉仙助先生の功績は、泉熱の病名とともに永久に消えることはない。

Yersinia Pseudotuberculosis Infection —With Special Reference to Etiology of Izumi Fever—

Kazumine KOBARI

School of Medicine, University of the Ryukyus, 207 Uehara Nishihara-cho Okinawa 903-01

Since in 1927 Dr Sensuke Izumi, former professor of pediatrics in Kanazawa Medical College (at present School of Medicine Kanazawa University) described a new children disease with rash which was similar to that of scarlet fever, sporadic cases and outbreaks of the disease were found in different places of Japan. It was called Izumi Fever in behalf of the name of the discoverer of the disease. As regards transmission route, waterborne infection was suspected. As far as the pathogenesis was concerned, several hypotheses were discussed among investigators. It was reported that certain virus was detected as a causative agent of Izumi Fever. However this report was not able to obtain general support.

As the pathogenesis has not yet been clarified, the disease has disappeared since 1955; neither sporadic case nor outbreak was reported anywhere in the whole country. However, in 1981 after a long interval, an outbreak of Izumi Fever-like disease occurred in the Okayama Prefecture. Subsequently, cases and some outbreaks were reported in this area. What deserved notice regarding these recently reappeared diseases was the fact that the causative agent of these diseases was identified as *Yersinia pseudotuberculosis*.

Now, whether the etiological agent of Izumi Fever which was before observed was *Yersinia pseudotuberculosis* or not, has been a new interesting topic. In this point of view, a special session for several papers of *Yersinia* infections was provided in the 60th Convention of the Japanese Society for Infectious Diseases, particularly in order to clarify the etiology of ancient Izumi Fever in relation to *Yersinia* infection.

Four important papers which were presented in the session are published in this issue.